ぽっぽニュース

TOPICS

2人目の「感染管理認定看護師」が誕生しました！

去る平成30年7月15日に血液内科と消化器内科の混合病棟に勤務する**吹曽 彩**（ふきそ あや）看護師が感染管理認定看護師の資格を取得しました。当院では坂本麗花に続き、2人目の感染管理認定看護師となります。今後のさらに充実した活動に向けて、その意気ごみをお伝えいたします。

感染管理認定看護師の役割は病院を利用する患者・家族、そして医療従事者など病院に関わる全ての人達を感染から守ることです。そのなかで現在、病棟勤務を強みに感染対策の実践モデルとして従事しています。また、疫学的知識をもとに実施する医療関連感染血流感染サーベイランスを実施しています。その結果をもとに今後、看護師の感染防止技術のさらなる向上を目指していきたいと考えています。

感染対策は、すべての医療従事者が実施することが必要です。そのための啓発、意識づけも含め、専従の感染管理認定看護師と協働し、感染管理を徹底していきたいと思います。

（感染管理認定看護師　吹曽　彩）

お知らせ

肺がんセミナーを開催します

「地域連携肺がんセミナー（肺がん治療を考える会）」を下記のとおり開催いたします。

次回で第５回を迎える研修会で、毎回、大変ご好評をいただいております。みなさまのご参加お申し込みをお待ちいたしております。

記

場　　所　天王寺都ホテル　5階　信貴の間・當麻の間
日　　時　平成３１年２月２日(土)　１６：００～１８：００（終了後情報交換会）
特別講演　大阪国際がんセンター 副院長 腫瘍内科部長 今村 文生 先生
一般講演　３題

※詳細は、プログラム決定後、別途お知らせいたします。

（写真は前回の肺がんセミナーの写真です。）

“私達は人間性を尊重し、謙虚で誠実な医療を提供します”

【基本方針】
安全で良質な医療を実践し、信頼される病院を目指します。
多機能型急性期病院としてチーム医療を推進し、継続的な医療を提供します。
地域に根ざした病院としての役割を認識し、住民の皆さんの健康増進に努めます。
地域医療機関との連携を重視し、きめ細かな医療に努めます。
専門性を追求し、医療レベルの向上と人材の育成に努めます。

大阪鉄道病院
Osaka General Hospital of West Japan Railway Company
〒545-0053 大阪市阿倍野区松崎町１丁目 2-22
TEL.06-6628-2221 FAX.06-6628-4707
ホームページ http://www.jrosakahosp.jp

受付時間／午前８時 30 分～午前 11 時 00 分
診療開始／午前９時 00 分～
休診日／土日祝・年末年始（12 月 30 日～１月３日）

201812

大阪鉄道病院
Osaka General Hospital of West Japan Railway Company

地域連携 ぽっぽ
よりよい医療の始発駅

Vol. 9
2018 December

診療科 UPDATE
放射線科・放射線治療科
ドクター・インタビュー
放射線科
部長　加藤武晴
医師／林 奈津子　中迫由里　岡本敏幸
放射線治療科
担当部長　道本幸一
医学物理士／久持真弥
がん放射線療法看護認定看護師／有薗恵子
専門領域を究めるリソースナースたち
＜特別編・入退院支援看護師＞
入退院支援調整役看護師　蔭山潤子
退院支援看護師　堂屋敷里子
登録医紹介／藤村外科医院　医療法人森医院
ぽっぽニュース

先進の機器と人間力で安全かつ質の高い診断と治療を目指す。

当院放射線部門は、画像診断を行う「放射線科」と放射線を用いて悪性腫瘍を治療する「放射線治療科」に分かれています。それぞれのドクターやスタッフから、その魅力を発信いたします。

放射線科 ドクターインタビュー

部長 加藤 武晴

加藤 武晴（かとう たけはる）

1970 年愛知県小牧市出身。1996 年京都府立医科大学卒業後、同大学放射線医学教室入局。98 年公立南丹病院（現京都中部総合医療センター）を経て 2000 年京都府立医科大学大学院に進み博士号取得。2004 年より放射線医学教室助手、2007 年松下記念病院放射線科主任、副部長を経て 2016 年より現職。日本医学放射線学会診断専門医、日本 IVR 学会専門医、日本核医学会 PET 核医学認定医、検診マンモグラフィ読影認定医、日本医学放射線学会研修指導医

正確な画像診断を支える充実の機器

画像診断においては、解像度の高い画像を撮像することが前提となります。当科では最新型の 320 列マルチディテクターＣＴ、1.5Ｔの解像度の高いＭＲＩ機器を導入し、短時間で高画質の撮像を行っています。このほかラジオアイソトープを用いた核医学検査やマンモグラフィ検査など、ご要望に応じてさまざまな画像検査を行なっています。

また、来年度には MRI 装置をリニューアルの予定です。最新のスペックを有する機器で、さらに高精彩な画像が撮像できると期待しています。当院の放射線科は病院の規模に比して検査機器がとても充実しています。

画像診断のプロとして

機器の充実は放射線科にとって重要ですが、得られた高画質な画像を的確に診断し治療に生かしていくことが大切です。

現代の医療では、画像を撮らずに手術することはあり得ませんから、その意味でさまざまな臓器、幅広い病気の治療に関わる診療科であることは、画像診断医としてやりがいを感じています。普段は患者さんの前に出ることも少なく、決して派手な存在ではありませんが、縁の下の力持ち的な役割を果たしていると自負しています。

画像診断は推理小説に似ています。患者さんの症状や血液検査のデータなどの「状況証拠」をもとに画像のなかから「物的証拠」を探し出す。それはとても地味な作業でもありますが、治療方針に影響することも多く緊張感をもって取り組んでいます。画像で犯人（疾患）がみつかり治療につながったときは充実感をおぼえます。

プロフィール +α

趣味は庭いじり。植木の剪定から雑草抜き、毛虫退治まですべてやります（笑）。また家の前の菜園では野菜づくりも！

画像を通した密なるコミュニケーションを

画像診断は、診療の一過程に過ぎません。だからこそ、依頼される先生とのコミュニケーションがとても重要です。ご依頼の目的をしっかりと把握し、それに応える画像を得るために CT・MRI 検査では撮像前に全例プレチェックし、撮像方法を指示しています。そして依頼医がどんな情報を求めておられるのかを意識して、目的に即したレポートを作製するように心がけています。画像を通した快いコミュニケーションがよりよい診療につながっていくと思いますので、ご依頼の際には検査目的や臨床経過をご教示いただきますと大変助かりますし、希望の撮像法がありましたら、ご遠慮なくご指示ください。

当科には現在、常勤の画像診断医が 4 名在籍しています。うち 3 名が画像診断専門医であり、マンモグラフィや画像下治療（IVR）の専門医も複数おり、全員が画像診断のプロとしての自覚のもと、切磋琢磨しています。どうぞ安心しておまかせくだい。

＜医師紹介＞

CT 搭載のハイブリット型装置を活用したIVR 治療の経験も豊富です。

医長　林 奈津子（はやし なつこ）

日本医学放射線学会診断専門医、日本 IVR 学会専門医、検診マンモグラフィ読影認定医

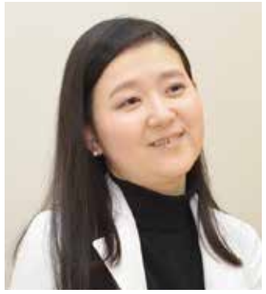
＋α

今年４月に産休から復帰。今は子育てに日々、喜びを感じています。

地域の先生方から画像診断のオーダーをいただく場合は、所見にお問い合わせいただく手間がないよう、できる限り丁寧にわかりやすいレポートを書くように心がけています。このまま様子見でいいのか、進んだ検査をすべきかなども含め、顔の見えない関係だからこそ、より治療にお役立ていただきやすい情報が提供できればと思っています。

また、院内からのオーダーに対応するかたちではありますが、当科ではIVR 治療にも積極的に取り組んでいます。特に肝動脈化学塞栓療法や肺腫瘍の CT ガイド下生検では豊富な経験を積んでおりますので、心にお留めおきいただければ幸いです。

安心して画像診断を受けていただけるよう心がけています。



医長　中迫 由里（なかせこ ゆり）

日本医学放射線学会診断専門医、検診マンモグラフィ読影認定医、日本医師会認定産業医

＋α

映画鑑賞にハマっています。Amazon Prime のおすすめも参考に（笑）ノンジャンルで。

患者さんと接する機会は少ないですが、画像を通して診療科の連携や患者さんの最適な治療選択に貢献したいと考えています。同意書をいただく時のご説明などは、患者さんの不安を軽減しつつメリットと副作用などのデメリットをわかりやすく説明し、納得いただけるように心がけています。

また当病院では常に患者さんに近い場所で読影をしているので何かあればすぐに駆けつけることができ、安全性の面でも十分な信頼をいただけると思います。先生方には安心してご依頼頂けるよう、丁寧な読影を心がけ、知識の向上に努めたいと思っています。

期待に応えられるよう、まずは経験を重ねてまいります。

医員　岡本 敏幸（おかもと としゆき）

＋α

信州の大学時代に始めた競技スキーでは部長も経験。今もシーズンになるとスキー場に。

当科には画像診断だけでなく、IVR-CT も導入され、アンギオなど幅広い手技ができる医師が多いので、とても勉強になります。他科の先輩医師やスタッフも含め、院内の風通しがよくコミュニケーションが取りやすいのも新人の私にとってありがたいことです。疑問はどんどん投げかけて、少しでも多くのことを吸収していきたいと思っています。来年にはまず放射線科専門医の資格を取る予定ですが、信頼される専門医としてより診療に貢献できるよう精進してまいります。

患者さんに寄り添いながら安全確実な放射線治療を。

放射線治療科 ドクターインタビュー

担当部長 道本 幸一

道本 幸一（みちもと こういち）

1963 年兵庫県神戸市出身。1990 年大阪市立大学工学研究科応用物理学専攻（前期博士）終了。92 年鳥取大学医学部医学部入学、98 年に同大学卒業後、京都大学医学部附属病院医員を経て、鳥取大学医学部放射線科に入局。国立浜田病院放射線科、癌研究会附属病院放射線科、鳥取大学放射線治療科勤務ののち 2015 年４月より現職。日本医学放射線学会放射線治療専門医、日本がん治療認定機構がん治療専門医。

一人ひとりの患者さんとしっかり向き合う

根治から緩和まで、さまざまな病態に応じて放射線治療を行っています。

どのように放射線治療を行うかの判断は専門的知識が必要です。当科では、放射線治療専門医が院外からの相談に対応するとともに、院内の他診療科とも連携し患者さんの病状に合った最適な治療を行っています。患者ご自身が納得して治療を受けていただけるように、治療に関して丁寧に説明し、ご相談にお答えしています。

また治療中、治療後に定期的な診察を行い、副作用の早期発見と重症化の予防に努め、患者さんがより安全に安心して放射線治療を受けることができるように努めています。

頼れる専門家たちのサポート

加えて、放射線医学を物理的・技術的見地からサポートしてくれる医学物理士が常駐していることは、この規模の病院には珍しいことといえます。物理学の科学的知識を医療の分野に応用する専門家として、放射線治療の安全性を担保してくれる重要な職種です。また放射線治療認定看護師も初診時から同席し、患者さんの状況や照射の内容について逐一把握して、医師との間に立ってきめ細やかにフォローしてくれます。このように充実した陣容のもとで安全な治療ができるのは、非常に恵まれた環境です。

プロフィール +α

現在、単身赴任中で近郊からJRで通勤しています。趣味は、しいて言うなら読書でしょうか。ジャンルにこだわらない乱読で、本はいつも通勤の友ですね。

日進月歩の放射線治療科

ご存知のとおり、IT 技術の進展とともに放射線機器の発達も著しく、より強い放射線を正確により小さく当てることで、抗腫瘍効果が高く副作用が少ない治療が可能になってきました。

当科では、3次元放射線治療を用いた通常照射に加え、主に前立腺がんを対象とした強度変調放射園治療（IMRT）を行っています。多くの症例において照射前に画像誘導を行い、治療寝台（ロボットカウチ）で照射位置をミリ単位で微調整することで照射精度を上げています。この画像誘導放射線治療により、照射範囲を可能な限り小さくして副作用を低減した治療を目指しています。

原発部位別に見ると現在は乳癌、肺癌、前立腺癌の症例数が多く、次いで消化器系や造血リンパ系など多様な疾患に対して治療を行っています。今後もあらゆる意味で患者さんにやさしい治療を実現すべく努力してまいります。

＜当院の放射線治療＞

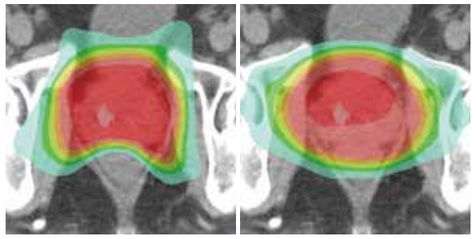
3次元放射線治療

最新の高エネルギーX線放射線治療装置（リニアック）を用い、腫瘍の形に合わせて、色々な方向から放射線を照射する治療。さらに放射線を照射する位置の精度を上げるために、放射線治療装置に連動したX線撮影装置やCT撮影装置を使い、位置の“ずれ”を補正することで、体の中の病巣に対して極めて正確（ミリ単位）に放射線を照射することが可能です。その他、肺がんのように呼吸で移動する腫瘍の場合は、呼吸の状態を含めた４次元CTで腫瘍の移動範囲を評価し、呼吸による“ずれ”を小さくする工夫をしています。

強度変調放射線治療

(IMRT: Intensity Modulated Radiotherapy)

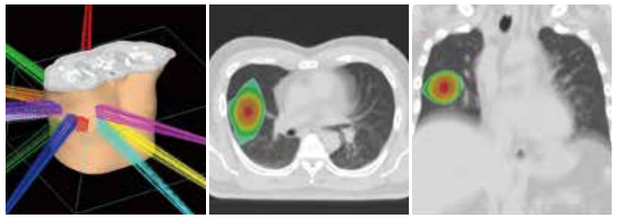
放射線の強さを複雑に変化させ、腫瘍の形状に合わせて照射を行う最新の治療技術です。周囲の正常組織への放射線を減らして副作用を低減しつつ効果的な照射が可能です。当院の強度変調放射線治療は、VMAT(Volumetric Modulated Arc Therapy)と呼ばれる強度変調回転照射で行っています。VMATはIMRTの進化した治療方法で、照射時間が２～３分と短時間です。当院では主に前立腺がんに対して行っており、手術と同等の治療効果と考えられています。



強度変調放射線治療　　従来の治療

定位放射線治療

いわゆる“ピンポイント照射”です。小さな腫瘍に対して、多方向から大線量の放射線を集中して当てる治療法です。当院では主に肺の腫瘍に行っています。原発性肺がんの場合は、転移のない、大きさが概ね3～4cm以下で、肺の末梢に腫瘍が存在する場合が適応となります。治療は連日4日間、1日1回で終了し、外来通院が可能です。効果は手術に匹敵すると考えられ、副作用が少ないのが特徴です。



＜スタッフ紹介＞

何よりも大切にすべきは安全です。

医学物理士 **久持 真弥**（ひさもち しんや）

放射線治療医との連携のもと、放射線を用いた治療計画を医学物理学の専門家としての観点から検証し最適化を行っています。やや専門的な表現をすれば、患者さんの体内での吸収線量に関する位置的精度と量的精度が臨床上必要な範囲に収まっていることを確認し、医師の処方どおり治療が行われている事を担保します。副作用を抑えがんをより効果的に制御するするためにも、安全性は欠かせません。常にその意識を持って、仕事に向き合っています。また、今後はチームとして安全文化の醸成にも力をいれるべく、まわりを啓発し育てていくことにも力を入れていきたいと思っています。

患者さんの力を引き出しながら治療完遂へ。

がん放射線療法看護認定看護師 **有園 恵子**（ありぞの けいこ）

放射線療法はまだまだ知られていないことや間違った知識、誤解をもっている方も多くいます。正しく理解してもらえるように、治療前はパンフレットを用いながらオリエンテーションを行い、治療中の過ごし方についても出来るだけわかりやすく説明を行います。また、治療中は毎日患者さんの表情や副作用の観察をしながら必要な支援を行っています。更に、医師、診療放射線技師と常にコミュニケーションをとりながら情報共有に努め、安心して安全に治療が受けられるようにチームで支援しています。本院の放射線治療科は、関連部門との連携体制のもとで患者さんの苦痛を可能な限り軽減して治療が受けられるように工夫しながら支援することができていると自負しています。放射線治療を受けるかどうか悩まれている患者さんがいましたら、放射線療法はとのような治療法か、治療を受けながらどのように過ごせばいいのかなど説明をさせていただきますのでいつでもご紹介ください。

Expert！ 専門領域を究めるリソースナースたち

今回は〈番外編〉として、入退院支援看護師の活動をご紹介いたします。

地域医療との連携をよりスムーズに。

入退院支援調整役
副看護部長兼地域医療連携室副室長 **蔭山 潤子**

ご存知のように、近年では地域包括ケアシステムの構築とともに、地域基幹病院においては患者さんの退院後の生活を見据えた入退院支援の推進が求められています。当院でもこれに対応すべく、２０１５年に立ち上げた入退院サポートコーナーに、この春から入院支援看護師3名を専任で配置しました。また、退院支援看護師４名は、2年前からそれぞれ2病棟を兼務し、専従で退院支援を実施しています。互いの連携のもとで入院前から退院後の生活を見据えて活動することで、スムーズな退院と患者さんとそのご家族が望む暮らしの実現につなげることを目指しています。

担当する看護師たちは、それぞれが懸命に学びながら、患者さんのために奔走しています。特に退院支援看護師を病棟に専従で配置して以来、地域のケアマネージャーさんや訪問看護師さんからも窓口が明確になり連携がとりやすくなったとご好評をいただいています。今後も病棟看護師とも連携し、退院後のご希望を考慮しながら患者さん一人ひとりに合った入院治療と看護を提供し、よりご満足いただける在宅医療へとつなげていきたいと思います。

～退院支援の現場から～

それぞれのご希望に寄り添い、きめ細かな対応を。

退院支援看護師 **堂屋敷 里子**

ようやく軌道に乗ってきた活動

退院支援のメンバーは現在４名、私は専従として入院支援看護師、病棟看護師、また退院支援看護師同士も情報共有しながら、日々活動しています。病院勤務の看護師として、以前は退院がゴールという感覚を持っていましたが、現在はその先、地域に戻られていかに安心して暮らしていただくか、またターミナルの患者さんにおいてはいかに苦痛が少なく安らかな日々を過ごしていただけるかが大きな課題となっています。いずれも患者さんやご家族のご希望や状態からご自宅の環境までを把握しての提案が必要で、かつてはMSWが担っていたことも、私たちの仕事の範疇に入ってきました。新たに学ぶべきことも多く大変ではありますが、看護師の視点を入れることで、QOLの向上など医療の強みを活かしていけることは、患者さんにとっても有益だと思います。退院支援を始めた当初は無我夢中で気ばかり先走り、お叱りを受けるようなこともありましたが、経験を積むごとに視野もネットワークも広がって、提案の選択肢も増えています。

登録医の先生方へのお願いとして

在宅医療を担うかかりつけ医の先生方とのコミュニケーションも重要だと実感しています。特に医療依存度の高い患者さんが退院される前には、合同カンファレンスを開催する機会が増えています。退院前にかかりつけの先生方とお会いして情報を共有することは、患者さんやご家族の不安を和らげ、より安心感を持ってご自宅へ帰っていただくためにも、たいへん有効です。お忙しいとは思いますが、退院直前の患者さんの状態を、主治医をはじめ、リハビリ技士、薬剤師、ＭＳＷなど多職種と共有できればと思っています。またカンファレンスはなくとも、ご相談や確認のため退院支援看護師から地域の先生方に直接お電話をさせていただくことがあるかと思います。ご面倒をおかけいたしますが、ご協力いただけたら幸いです。

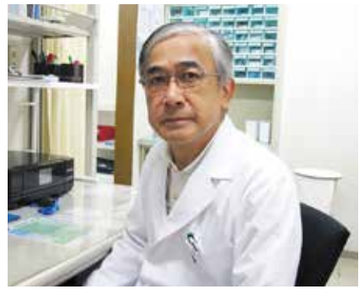
これからも病院と地域の顔が見える関係、連携を目指して、活動してまいりますので、どうかよろしくお願いいたします。

多職種カンファレンス

登録医紹介

藤村外科医院

標 榜 科：内科／外科／皮膚科／放射線科
住　　所：〒546-0014
大阪府大阪市東住吉区鷹合３−14−17
電話番号：06-6691-5167
アクセス：近鉄南大阪線　矢田駅　徒歩約11分
近鉄南大阪線　針中野駅　徒歩約13分



藤村 浩人 院長

── 御院についてお聞かせください。

昭和54年に金沢医科大学を卒業し、星ヶ丘厚生年金病院での外科勤務を経て、平成６年に父の跡を継いで幼少期を過ごした地元で開業しました。
勤務医時代には、消化器外科を専門として多くのがん疾患の診断と治療に携わりました。
開業当初の目標は、自分の専門性を生かしつつも、それに偏ることなく、受診された方の訴えにはしっかりと耳を傾け良質な医療の提供に心がけ、必要に応じて信頼のできる専門医に紹介のできる町医者を目指すことでした。現在も初心を忘れず、日進月歩の医療の進歩に遅れを取らないように日々研鑽に努めております。これからも地域医療のためにがんばっていきたいと考えています。

──JR大阪鉄道病院へのメッセージをお願いいたします。

日ごろからスムーズな病診連携を進めていただいており感謝しています。
緩和ケア病床開設後１年になりますが、当院の患者さんもお世話になりました。
JR 病院は大阪南ブロックにはなくてはならない病院となっています。今後病院の役割はますます多様化すると思いますが、さらなるご活躍を期待しています。

──ご要望がございましたら、お聞かせください。

高齢化社会の中で在宅医療が進められていますが、在宅患者の急変時の診療や入院に対応していただける病院の存在は今後ますます重要になってくると思われます。今後 JR 病院は救急医療に積極的に取り組まれる方針とお聞きしています。地域の在宅医療促進のためにも、できるだけ早い実現を期待しています。

医療法人森医院

標 榜 科：内科／消化器科／胃腸科／小児科／肝臓内科
住　　所：〒546-0042
大阪府大阪市東住吉区西今川３−７−11
電話番号：06-6702-7034
アクセス：地下鉄谷町線　駒川中野駅　徒歩５分
近鉄南大阪線　今川駅　徒歩３分

森 能史 院長

── 御院についてお聞かせください。

来年で開院 60 周年を迎えます。私は京都府立医大旧第三内科肝糖研グループで主に肝線維化、臨床では肝炎肝がん治療に携わってまいりました。
開業後は消化器内科、糖尿病診療を主体に診療しております。日常診療では軽微な風邪症状の訴えのなかに隠れた早期のがんを内視鏡、超音波等で発見し迅速な病院への紹介を心がけております。

──JR大阪鉄道病院へのメッセージをお願いいたします。

大阪鉄道病院は私が最も頼りにしている病院です。同門の先生方が多く、また病診連携にご尽力いただき、東住吉区医師会としても病診連携担当副会長として大変お世話になっております。
地域の診療所と緊密な連携がとれ、高度な医療を行ってもらえる病院、私が思う大阪鉄道病院はその理想の病院と感じております。

──ご要望がございましたら、お聞かせください。

今後とも地域住民のため、公私ともよろしくお願い申し上げます。